

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370018

研究課題名(和文) 分析哲学とドイツ観念論の連携およびそのグローバルな意義

研究課題名(英文) Corabolation between Analytic Philosophy and German Idealism and its Global Significance

研究代表者

入江 幸男 (Irie, Yukio)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70160075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：近年、分析哲学からのドイツ観念論の再評価が注目を集めており、なかでもピッツバーグ大学のブランダムとカントとヘーゲルの再評価は、現代哲学にとって重要な意味を持っている。本研究では彼の仕事を引き継いで、さらに展開することを目指した。フィヒテの判断論の読みなおしによって、フィヒテにすでに意味の全体論が見られることを指摘した。また問答の観点から意味論を捉え直すことにより、ブランダムの意味論を拡張するなどの成果を得た。また本科研費で超越論的論証についての、国際会議を開催し、その成果を出版(近刊)できる予定である。

研究成果の概要(英文)：Recently German Idealism is reviewed by analytic philosophers, esp. the reevaluation of Kant and Hegel by Robert Brandom and John McDowell is very significant in contemporary philosophy. In this research I tried to develop their works by reviewing the theory of judgment by Fichte. I pointed out that Fichte claimed the semantic holism. Adding to that, I expanded the inferential theory of meaning by Brandom from the point of view of relation between questions and answers. Further I organized an international conference on the transcendental argument and its result will be published in USA in soon.

研究分野：ドイツ観念論研究

キーワード：フィヒテ 意味の全体論 推論主義意味論 問答意味論 ブランダム

1. 研究開始当初の背景

英米の分析哲学とヨーロッパ大陸の哲学は、20世紀にはあまり交流がなかった。しかし、その状況はようやく変わりつつある。一つには、グローバル化の時代になって、ヨーロッパの哲学にも、ローカルな歴史や文化を背景にすることによってのみ意味を持つような思想ではなく、グローバルに理解されることが可能な思想の営みが求められるようになってきていることがある。他方で、分析哲学の側にも、大陸の哲学の見直し、とりわけドイツ観念論の見直しの動きがある。その理由は、論理実証主義が批判された後、プラグマティズムの再評価が起こり、それにもなつて、古典的プラグマティズムに強い影響を与えていたドイツ観念論の再評価が起こったことにある。

とりわけ現在はピッツバーグ大学のブランダム (Robert Brandom) とマクダウェル (John McDowell) が、積極的にカントとヘーゲルの再評価を行なっている。彼らは、単にカントやヘーゲルについての新しい解釈を提案するというのではなく、現代哲学の課題の解決にカントやヘーゲルを利用しようとしており、哲学的な関心よりは、むしろ哲学研究としての関心に基いている。彼らが、カントやヘーゲルを再評価しつつ、主張しようとしているのは、意味の全体論と価値実在論である。

2. 研究の目的

「分析哲学とドイツ観念論の連携とそのグローバルな意義」の研究目的
近年分析哲学からのドイツ観念論の再評価が注目を集めている。中でも、ピッツバーグ大学のブランダムとマクダウェルによるカントとヘーゲルの再評価は、現代哲学にとって重要な意味を持っており、彼らがドイツ観念論を援用しながら主張している新しいタイプの意味の全体論や価値の実在論

を検証することが第一の課題である。第二の課題は、意味の全体論や価値の実在論は、言語の理解や価値認識にとどまらず、文化の理解全体にもかかわる主張であるので、この成果をグローバル化の時代における文化の理論の基礎理論へと展開することである。

3. 研究の方法

ブランダムとマクダウェルの議論を理解するには、現代の哲学的意味論や知識の哲学を十分に知らなくてはならない。またドイツ観念論についての知識も必要である。応募者はたまたまこの両方に興味をもって研究を行ってきたので、それを生かして研究したい。しかしそれでも問題は多岐にわたるので、分析哲学とドイツ観念論の連携を、意味の全体論と道徳の実在論という二つに焦点を当てて研究に取組みたい。次に、この連携が、グローバル化する時代の中での哲学の変容にとってどういう意味を持つのか、またこの連携の成果が、とりわけグローバル化する社会のなかでの文化の変容、多文化主義、グローバルな文化の可能性の検討に、この連携をどのように生かせるのかという観点から研究を進めたい。

4. 研究成果

H25年度の計画の1つは、ブランダムのプラグマティックな推論主義の意味論とドイツ観念論の関係を解明することであった。これに関しては、ヘーゲルに先んじてフィヒテが意味の全体論を主張していることを明らかにするとともに、ブランダムのドイツ観念論理解の修正を提起した。後期フィヒテの論理学研究の特質を解明して、フィヒテの推論理解がヘーゲルの理解と似たものであり、フィヒテもまた知が判断ではなく推論という形式をとると考えていたことを示し、フィヒテの中にも推論主義

を読み取ることが可能であることを示した。

フィヒテによるスピノザ批判を明らかにした。(これらはアメリカで出版の論文集、および日本で出版の論文集、および雑誌『思想』に発表した。)(2)H25年度の計画の2つ目は、ブランダムのコミュニケーション理解の文化間翻訳への適用を試みることであった。これについては、従来のナショナル文化が社会的に構築されたものであり、これが近代社会の自己反省的な構造に由来するという認識を、グローバル化そのものやそれによる文化の変容にもそのまま適用し、これらもまた近代社会の自己反省的な構造に由来するものであることを指摘した。コミュニケーションの可能性を、グローバルな間主観性ではなく、パースペクティブの転換として捉えるというブランダム アイデアは、文化を記述概念ではなくて、操作概念として捉えるヴォルフガング・ウェルシュの Transculturality 論に類似していることが分かった。(これについては、ゲッティンゲン大学で開かれた研究会で発表した。)

H26年度は、(1)ブランダムの *Between Saying and Doing* を読み、ブランダムの意味論の最近の新しい展開(古典的な分析哲学のアプローチとは異なる、プラグマティックに媒介された意味論関係の分析)を確認し、それを文化理解への応用の可能性を検討した。また、(2)推論が問いに答えるプロセスとしてのみ成立することを、理論的推論と実践的推論の両方について確認した。また問いと問いとの論理的な関係についても分析を行った。(3)さらに、コリングウッドテーゼを、社会問題と社会制度、個人問題と個人の関係の説明にも応用すること、社会問題と個人問題を構成する問いの前提として「文化」をとらえること、さらに、文化の比較の決定不可能性を、概念と内容の区別の決定不可能性と、問題の差異と答

えの差異の区別の決定不可能性に基づいて論証し、そこに逆に文化の創造の可能性があることを明らかにした。

H27年度は、2015年4月22日~24日に大阪大学豊中キャンパス文学研究科本館で国際研究会議「The Conference on Transcendental Philosophy and Metaphysics」を開催し、超越論的論証の可能性を検討した(参加者:USAから4名、カナダから1名、イギリスから1名、ドイツから1名、中国から1名、国内3名)。この成果は、論文集として *Transcendental Inquirely: Its History and Critiques*, ed. by H. Kim and S. Haelzel, Palgrave Macmillan, 近刊の予定である。5月には、イギリスから価値実在論者の Nick Zangwill を招いて意見交換を行い、研究が遅れている価値実在論について意見交換した。9月にはマドリッド(スペイン)で開催された国際フィヒテ学会で発表した。(この成果はいずれ Fichte-Studien に掲載予定である)。今年度後半にはサバティカルを利用して、2015年10月16日から2016年1月16日までピッツバーグ大学に客員研究員として滞在し、ロバート・ブランダム教授のもとで、彼の推論主義意味論を問答の観点から拡張するための研究に取り組んだ。今年度の研究成果の一つは、フィヒテ研究の上では難問とされてきた問題、前期フィヒテが物自体を否定したにも関わらず、後期になって知とは独立した存在を認めるようになる理由についての新しい説明を提案し、観念論を徹底することの困難を明らかにしたことである。第二は、問答論的矛盾というあたらしい概念の提案と、それにもとづいてコミュニケーションの超越論的な条件のいくつかを論証したことである。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

入江幸男(単著)「『意識の事実』(1813)と知識学の関係 あるいは、アポステリオリな知とアプリオリな知の関係 『フイヒテ研究』21号、21013年11月、pp. 39-53.

Yukio Irie(共著), “Illocutionary Acts from the Perspective of Questions and Answers”, in *Philosophia Osaka*, Nr. 10, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2014/3, pp. 39-48.

入江幸男(単著)「フイヒテのスピノザ批判」『思想』No. 1080, 2014年4月号、岩波書店、pp. 200-218.

入江幸男(単著)「問いと推論」『待兼山論叢』第48号、2014年12月、pp.1-16.

[学会発表](計 4件)

Yukio Irie, “The Self-reflectiveness of Society -- Nationalism, Idealism, and Social Constructionism --”, HeKKSaGOn Presidents’ Meeting University of Göttingen, September 13. 2013.

Yukio Irie, “Indeterminacy and creation in cultural comparizon”, HeKKSaGOn Presidents’ Meeting in Tohoku University, Haki Hall in Tohoku University, April 17. 2015.

Yukio Irie, “An Alternative Transcendental Argument”, in The Conference on

Transcendental Philosophy and Metaphysics, at The Graduate School of Letters Osaka University, April 22-24, 2015,

Yukio Irie, ‘Thing in Itself and Being’ in IX. KONGRESS DER INTERNATIONAL J. G. FICHTE-GESELLSCHAFT, Universidad Autonoma de Madrid, September 8-11, 2015.

[図書](計 3件)

Yukio Irie (共著), *Kant, Fichte, and the Legacy of Transcendental Idealism*, by Halla Kim and Steve Hoeltzel (ed.), Lexington Books, Dec. 2014. (Yukio Irie, ‘Fichte and Semantic Holism’)

Yukio Irie (共著), *Begegnungen in Vergangenheit und Gegenwart*, Claudia Rammelt, Cornelia Schlarb, Egbert Schlarb (HG), Lit Verlag Dr. W. Hopf Berlin, Juni, 2015. (Yukio Irie, ‘Question and Inference’, pp. 365-375.)

Yukio Irie(共著), *Transcendental Inquiry: Its History, Methods and Critiques*, ed. by H. Kim and S. Haelzel, Palgrave Macmillan, 2016 (at press) (Yukio Irie, ‘Transcendental Arguments Based on Question-Answer Contradictions’)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

入江 幸男 (IRIE, Yukio)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 70160075

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: